本校の就労支援と中学部の作業学習

～支援内容の見直しと３つの作業班に共通してつけたい力を考える～

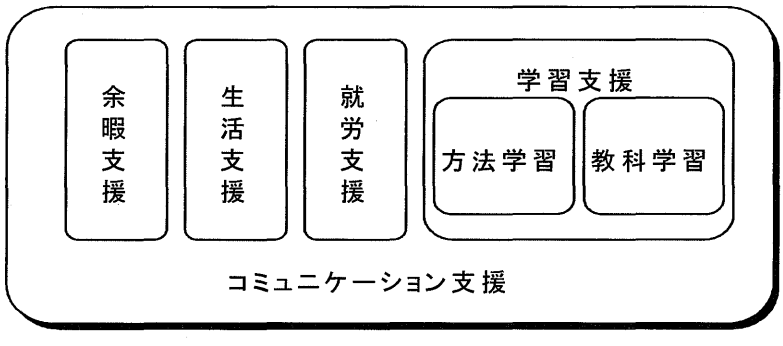
石井智也　高梨良記　中村昌宏　西尾真弓　野原隆弘　橋都由美子
橋本奈緒子　蓮香美園　松本直巳　矢間直世　吉田友紀
伊藤友彦　加瀬進　澤隆史（東京学芸大学特別支援科学講座）

Ⅰ．序および目的

１．本校中学部の「作業学習」について

１）本校の教育課程と中学部「作業学習」

本校では、平成１２年度から平成１５年度までの４年間、「個別のニーズにこたえる教育課程」をめざして研究を進めてきた。そして、個別教育計画による個別の教育的ニーズの把握の累積の結果と、近年の社会的要請の観点から、教育課程を編成するための新しい内容区分を図１のように考えた。すなわち、知的障害のある幼児児童生徒の教育的ニーズに応じた支援内容として、生活支援、学習支援、就労支援、余暇支援の４つの区分と、それらの基礎・基本となるコミュニケーション支援を加えた支援内容区分である。（本校紀要ＮＯ.４６）



【図１　本校教育課程（５つの支援内容区分の関係）】

さて、今年度、本校では教育課程を編成する内容区分である、生活支援、学習支援、就労支援、余暇支援、コミュニケーション支援という５つの支援内容区分に対応した支援内容配列表の改訂に向けて着手することとなった。こうした経緯のもと中学部ではまず「作業学習」の授業実践を切り口に就労支援の支援内容配列表に迫ることとした。

「作業学習」は各校でいろいろな実践が展開されている。また、キャリア教育の推進が語られ、これまでの社会参加と自立に向けて取り組んできた実践を振り返り、充実させていくことが求められている。さらに、生徒たちが高等部を卒業した後に就く職種にも年々変化が見られ、高等部卒業後の生活への考え方も拡がりが見られる様になってきたと考えられる。そのような背景の下で、中学部段階の作業学習で押さえるべき指導内容についての議論を重ね、共通理解を図り、就労支援内容配列表の改訂に向けることから着手することが大切と考えた。

本校での「作業学習」は就労支援の支援内容を具体的に展開する授業として、中学部段階では中心的な位置を占めている。本校の就労支援は「地域社会の中で主体的に働くための実用的な知識、技能、態度への支援」とされている。中学部段階の支援内容については表１のように示され、主に【働くことに関する意識や技能】【自己理解と職業適性】に関わる内容を中心に、将来の職業生活

【表１　就労支援内容配列表・中学部抜粋】

			中学部
働くことに関する意識や技能	働く意欲 喜び 役割意識	・働くことの喜び ・目的意識 ・労働意欲 ・役割意識 ・労働の意味の理解	○自分の役割を果たすことで成就感を持つ。 ○目的意識を持って活動に取り組む。 ○自分の作った物が他の人に喜ばれることを体験する。 ○責任を持って自分の役割を果たす。 ○販売することで物を作ることの意味がわかる。
	作業能力	・作業技能 ・遂行能力 ・集中力 ・持続力 ・体力	○手指やからだが上手く動くようになる。 ○道具の扱いになれ、機械の使い方を経験する。 ○自分の作業内容がわかり、自分で作業を進められる。 ○目的を持って作業を進められる ○作業能力としての集中力、働くための体力をつける。
	対人関係	・基本的な対人関係 ・職場での対人対応	○作業現場で必要な挨拶や返事の仕方を身につける。 ○きちんとした態度で作業に取り組む。 ○報告の仕方を覚える。
職業についての知識と理解		・家庭内労働の理解と参加 ・身近な人の仕事 ・いろいろな仕事とその分類 ・産業や社会の基礎的な理解	○家庭内の仕事がわかり、役割として参加する。 ○身近な人（父母等）の仕事を知る。
自己理解と職業適性	自己理解 自己選択	・自己選択 ・自己理解 ・意思の表明	○自分の好きなこと・嫌いなことがわかる。 ○自分の得意なことがわかる。 ○友だちの良いところ・不得意なところがわかる。 ○自分の希望を表明する。
	職業適性 就業体験	・職業適性 ・就労先の見学 ・就業体験	○自分の得意なこと不得意なことがわかる。 ○やりたい仕事を持つ。
職業生活の理解と生活設計	職業生活の知識と理解	・「働く」生活の全体像 ・職業生活について ・キャリアアップ ・余暇について	○作業学習に参加する
	将来の生活と生き方	・将来の希望 ・自分の生き方 ・生活設計 ・進路選択	○高等部の生活について知る。 ○高等部の生活を体験する。 ○進学について自分の希望を表明する
実際の社会への移行		・移行（就労参加）の支援 ・福祉制度の知識と活用 ・社会生活の知識 ・余暇支援	

の基礎になると思われる内容が多く配列されている。（本校紀要ＮＯ.４７）

現行の中学部「作業学習」は農耕班、陶工班、手工班の３つの作業班から成り、この３つの作業班の全体目標を「ものを作ったり、育てたりすることに興味を持ち、目的的に活動することを通して、将来の職業生活や社会自立の基礎となる力を培う。」としている。学年を越えた縦割りで構成され、原則として、中学部３年間在籍中に各作業班へ１年ずつ所属し、それぞれの作業班の特性に対応した学習経験を積む。この班編成での作業学習は昭和63年から続いてきた。そもそもこの当時は、ほとんどの生徒が高等部への進学することも前提となり、中学部の作業学習を学校における作業学習の前半部として捉え、多種の作業活動を通して多くの学習経験を積むことが大事と考えられ計画されるようになった。（本校紀要ＮＯ.４２）また、「作業学習」の年間計画の中では、１１月に「バザー学習期間」を設定し、バザーをめざして４週間集中して作業を続けることにより、

作業能力を高め、その製品を販売、製品がお金にかわり、そのお金で楽しむ経験をすることを通し、働く生活の理解へ向けて積み重ねていけるように計画されてきた。

新しい教育課程になり、平成13年に就労支援の支援内容を明らかにした後も、大筋では昭和63年からの流れと同様な作業学習を展開し、今日に至っていると考えられる。そして、こうした現状もまた、今年度の研究テーマに向けての課題意識に繋がる要因となっていることは言うまでもない。

２）キャリア教育と「作業学習」

キャリア教育は「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度を育てる教育。端的には、勤労観、職業観を育てる教育」と定義される(平成 16 年「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」)。平成２１年３月告示の新しい特別支援学校高等部学習要領総則には「キャリア教育」が規定され、自立と社会参加に向けた職業教育の充実が示された。東京都教育委員会は平成２１年３月に「知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進」として報告書をまとめ、全国特別支援学校知的障害教育校長会は平成２２年３月「特別支援教育のためのキャリア教育の手引き」を発表している。

こうした流れの中で、明らかにされているキャリア教育の内容、キャリア発達段階の視点も検討の要素に加えながら実践検討および支援内容配列表の見直しを行うことが必要なことは言うまでもない。「作業学習」の授業実践を検討することにより、本校中学部において、生徒のキャリア発達段階をどのように考えて実践しているかを整理し、検討することにもつなげていきたいと考えている。

２．今年度の目的

前述したことをふまえ、今年度の目的を以下のように考えた。

農耕班、陶工班、手工班の、３つの作業班の特性をふまえつつ支援内容配列表（就労支援）改訂の方向性を探り、中学部段階で、どの作業班でも共通して付けていきたい力は何かを考察する。

Ⅱ．方法

以下の３つの手続きを行い目的に迫っていく。

【手続き１】３つの作業班の研究授業を行い、各班の現在の課題について明らかにする。

【手続き２】現行の作業学習の指導内容を３つの作業班でそれぞれに検討し、３作業班に共通する指導内容、それぞれに特徴的な指導内容を整理・検討する。

【手続き３】上記の成果をふまえ、支援内容配列表の内容を検討をする。

Ⅲ．結果と考察

１．研究授業から探った授業実践上の課題

１）農耕班（平成２３年７月８日実施）

(1)題材名および主な題材設定の理由

「ジャガイモをたくさん掘ろう」

今回の学習は、昨年度末に前農耕班生徒が植えたジャガイモの収穫を行った。これまでに水やりや周囲の草運びなどの仕事で関わり育ててきた作物の初めての収穫となった。ジャガイモは野菜の収穫物の中でも比較的わかりやすさがあり、茎の根元に実をつけるため発見しやすい特徴がある。畑での動き方が理解できてきて少し作業に慣れてきた生徒もいることから、今回の学習で「ジャガイモをたくさん掘ろう」という学習を設定することで、収穫物を具体的に見比べ、たくさん働くということの理解につながればと考えた。

(2)本時の目標と就労支援内容配列表

本時の目標	関連する就労支援内容配列表
じゃがいもを掘り当てることができる じゃがいもを農舎まで運ぶことができる	働くことに関する意識や技能 ＞働く意欲、喜び、役割意識 ○自分の役割を果たすことで成就感を持つ。 ○目的意識を持って活動に取り組む。 ○自分の作った物が他の人に喜ばれることを体験する。 ○責任を持って自分の役割を果たす。 働くことに関する意識や技能＞作業能力 ○手指やからだが上手く動くようになる。 ○道具の扱いになれ、機械の使い方を経験する。 ○自分の作業内容がわかり、自分で作業を進められる。 ○目的を持って作業を進められる ○作業能力としての集中力、働くための体力をつける。

(3)授業の特徴

学習場所が畑となるためフィールドが広く、また作業内容によっては広範囲となるため音声を含めた指示が通りにくい弱点もある。(農耕班は秋から冬にかけてはバザー単元を設定し来年度のカレンダーを制作して販売している。)

作業場の特徴として例えば、畑の区画のA地点の草取りであったり、B地点の水やり等の作物の管理だったりする。それは、天候に合わせた作物の成長や適正時期の問題、畑の管理の問題等も考慮しながら学習が展開される。外気温に対して本人の体調のコントロールも難しい課題となる。

(4)現在の課題

現在の課題としては、以下の6つの項目からの課題が挙げられた。

収穫物の特徴：年間計画で作成されている作物が生徒の興味関心に一致しているかどうか。

作業能力的特徴：指導する内容等が整理されて実施されているかどうか。

個別教育計画の特徴：授業場面において個別教育計画を念頭においた指導がされているかどうか（共通理解がされて確認されているかどうか）。

作業環境について:多種多様な生徒がいるのに対して、適切な環境が保たれているかどうか。

衛生面について：一定の衛生面が配慮されているが、改善の余地があるかどうか。

中高の連携に対して：高等部にも農耕班があるが、そこの作業内容を指導方法との関連はどうか。

2）陶工班（平成２３年７月１５日実施）

(1)題材名および主な題材設定の理由

「井桁皿の製作」

本時の学習に取り上げる「井桁皿」の工程は、①玉作り、②紐作り、③格子状に粘土を組む、④色粘土を詰め、⑤たたら板で延ばす、⑥型に合わせるなど、練り込み皿の製作の基本的な要素

が含まれているものである。粘土を成形する作業には、手指の巧緻動作の訓練的な要素とともに見本と同じ大きさに仕上げるという課題も含まれ、これらの作業工程を理解し、なるべく均質に製作する意識できてくると、今後製作する製品の完成度が上がってくる。また、作業の工程で担当教員に報告することにより、製品の完成度を確認できたり、報告する習慣を作ることができると考えている。

(2)本時の目標と就労支援内容配列表

本時の目標	関連する就労支援内容配列表
玉、ひもの大きさ太さを意識する。	働くことに関する意識や技能＞作業能力 ○手指やからだが上手く動くようになる。 ○自分の作業内容がわかり、自分で作業を進められる。 ○目的を持って作業を進められる。
挨拶、報告ができる。	働くことに関する意識や技能＞対人関係 ○作業現場で必要な挨拶や返事の仕方を身につける。 ○報告の仕方を覚える。

(3)授業の特徴

年間を通じ、作業室への入室から、準備、作業、片付け、反省会、作業室からの退室までの流れを一定にし、生徒が見通しを持ちやすいように進めるなかで、上級生には課題に応じて役割を与えている。

「陶工製品」は粘土を使って主にお皿を中心とした食器作りを行っている作りを行っており、井桁皿、絵皿、ひも皿の３種類を主に製作していく。

「井桁皿」は陶工班における製品作りの工程を網羅しており、この工程を覚えることにより製品作りの基礎を学ぶことができるようになっている。

「絵皿」は皿に色粘土を用いて模様をつけるものである。デザインは果物、野菜、動物、顔、車など、様々であり、自分でデザインを考えて表現することもできる。模様に使用する色粘土は乾燥しやすく、また細かくひも状にしなくてはならないなど、根気強さと集中力が必要である。しかし、完成品は自分が製作したものという意識を持ちやすい製品である。

「ひも皿」は井桁皿の工程をやや少なくした物でデザイン的には縞模様の製品に仕上がる。工程としては玉つくり。ひも作りの後、ひもを色違いのひもを並べて製作する物で、これまでの製品に比べ作りやすく、少々ひもが太くなってしまってもそれが柄となるので、あまり太さを気にすることなく作ることができ、細かな作業が苦手な生徒や、授業の導入においては、取り組みやすい。

原則としてどの製品も初めから終わりまでのすべての工程を責任をもって担当するように計画し、完成の喜びから、達成感や成就感、次への意欲へと繋げたい。

今回の授業では、全員、井桁皿の製作を行った。

(4)現在の課題

陶工班では、製品については何でも好きな物を作るというわけではないが、絵皿などは自分の好きなデザインや色を選択できるようにしている。製品の完成度など作業班内で批評することで製品作りに対する意欲を持たせられるよう配慮している。それらを通して仕事に対する楽しみや肯定的な理解を促し、将来の職業生活や社会生活につながる土台を築いていきたいと考えている。

社会における労働場面での働き方を意識した内容にするのか、それ以外に方法があるかなど考え、中学部段階で身につけて欲しい働くための土台となる部分をどのように教えるかということを再確認しなければならないと考える。

３）手工班（平成２３年７月１３日実施）

(1)題材名および主な題材設定の理由

「花瓶敷き、アイロンビーズマグネット、ティッシュケースの製作」

花瓶敷き、アイロンビーズマグネット、ティッシュケースは、いずれも製品になるまでの作業工程が短い製品である。この時期はこれらの製品作りを通して、手工班ならではのいろいろな道具（織り機、アイロン、アイロン台、ミシン、裁縫用品等）の扱い方を身に付けていけるようにと考えた。また、完成までの見通しを持ちやすい製品作りを行うことは、わかって活動に取り組めることを大切にしながら、完成する喜びを積み重ね、作業への意欲や主体的に取り組む態度をいっそう育んでいけると考えている。

(2)本時の目標と就労支援内容配列表

本時の目標	関連する就労支援内容配列表
正しい手順・方法で作業を進める。 作業工程の区切りなどに自分から報告をする。	働くことに関する意識や技能＞作業能力＞ ○手指やからだが上手く動くようになる。 ○道具の扱いになれ、機械の使い方を経験する。 ○自分の作業内容がわかり、自分で作業を進められる。 働くことに関する意識や技能＞対人関係＞ ○きちんとした態度で作業に取り組む。 ○報告の仕方を覚える。

(3)授業の特徴

年間を通じ、作業室への入室から、準備、作業、片付け、反省会、作業室からの退室までの流れを一定にし、生徒が見通しを持ちやすいように進めるなかで、上級生には課題に応じて役割を与えている。

「織物製品」は織り機を使って、繰り返し同じ手順で織っていく簡単な工程である。横糸の張り方の力加減、横糸の変え方、横糸の用意の仕方、縦糸の仕上げ結び、姿勢の保持、織った長さを測る等を生徒の実態に応じて課題としていくことができ、糸の素材や色を生徒が選んだり、デザインを考えるところから製作することもできる。本時の花瓶敷きは完成までの期間が短く、生徒に繰り返し経験してほしい工程を用意しやすい。

「アイロンビーズ製品」はデザインを変えることで難易度を調節でき、5㎜程度のビーズをつまむ動きを繰り返し、型が埋まると次のアイロンを使った工程へに進むという流れは生徒にとって完成への過程や報告のタイミングがわかりやすい。また、材料の渡し方を調節することで持続して取り組む時間を長くしたり、報告の必要性の頻度を多くしたりすることもできる。さらに、デザインの幅も拡げやすく、生徒の興味に応じたものを用意しやすい。

「簡単な布製品」は、ティッシュケース、きんちゃく袋、エコバック、ランチョンマット、台布巾、シュシュ等、ミシンを使って、主に直線縫いでできるものを中心に生徒に応じた製品を計画している。今回のティッシュケースはミシンで短い直線縫いを行い、裏返して角を整えれば完成するという短い工程で取り組むこととし、完成の喜びを経験しながら、ミシンの操作に慣れるよう積み重ねやすいようにと考えた。

前期に取り組む３つの製品に関しては、前期で３つとも経験できるように考えている。また、原則としてどの製品も初めから終わりまでのすべての工程を責任をもって担当するように計画し、完成の喜びから、達成感や成就感、次への意欲へと繋げたい。

今回の授業では、手工班生徒７名のうち、花瓶敷きの製作に４名、アイロンビーズマグネットの製作に２名、ティッシュケースの製作に１名取り組んだ。

(4)現在の課題

手工班では、生徒が製品に魅力を感じ、「作ってみたい」「やってみたい」という気持ちを持って主体的に取り組むことを通して、将来の職業生活や社会生活に繋がる素地培っていきたいと考え、製作する製品を設定した。それぞれの製品作りにおける特徴は前述した通りであるが、これまでに手工班で製作した製品の変遷を踏まえた検討は十分とは言えない。また、現在は担当した製品を責任をもって最後まで完成させるという方法で作業を進めているが、一つの製品を分業して製作し、全体の中で自分の役割を自覚するよう進める方法もある。他の作業班での学習経験を踏まえた検討が必要と考える。

４）３つの作業班の課題から

３つの作業班それぞれが明らかにした課題から、作物や製品の題材としての検討と作業学習の作業場面の進め方についての検討が必要であることが明らかになった。

題材についてはそれぞれの作業班の特性を踏まえながら、生徒の実態を踏まえ、作業工程への理解、経験の拡がり、技能の獲得等を指標に、生徒の主体的な活動を引き出せ、段階的な指導が十分な活動量を確保して行えるよう、継続的に検討しなければならないと考えた。

もう一方の作業場面の進め方については、一つの製品を一連の作業として最後まで分担せずに取り組めるようにするか、或いは分業して製作するかという点に関する是非を中心に検討しなければならない。中学部段階の生徒たちが、達成感、成就感をもって作業に取り組み、それを働く意欲や、達成感に基づく肯定的な自己理解を育んでいくにはどういうあり方がよいか、さらにそれが就労へ繋がる基礎的な経験の一つとして積み上げられるようにするにはどうすべきか等を、指導計画と照らし合わせながら授業研究する必要がある。

５）課題と授業づくり

前述の課題については、陶工班と手工班での１２月以降の作業学習で実践検討を行うこととした。

陶工班も手工班も学年末のこの時期に分担を取り入れることによって、個々の生徒の得意とする技能を活かすことができ、その結果として製品作りにも変化が見られた。すなわち、よい製品がそりまで以上に作れるようになり、それを生徒たち自身が体験的に積みあげられたこと。仲間と分担・連携して取り組む過程において求められるコミュニケーションの力を高められたことである。また、１月には研究協議会の研究授業でも研究協議し、そこでは、中学部段階での作業学習においては作業に対する意欲をさらに喚起できるような展開が必要であることが確認された。

これらの成果は次年度の指導計画作り、授業作りに向けての貴重な資料になると考える。

２．各作業班の特徴的な指導内容、及び共通する指導内容

１）各作業班の特徴的な指導内容と共通する指導内容の整理

３つの作業班の特徴的な学習活動の内容は表２の通りで、就労支援内容配列表では『働くことに関する意識や技能』の中の『作業能力』の内容に対応する。

表２を念頭に入れて就労支援内容配列表に目を向けると、各作業班の作業特性に対応した生徒につけてほしい『作業能力』について、就労支援内容配列表の表記から、それぞれの作業班の特徴を細かく表し切れているとは言えない。また、その内容が中学部段階としてどの程度をベースラインとして考えられているかも伝わりにくいとも考えられる。学習活動への具体化に指導内容が反映しやすい表記、例示を検討することも必要であると考えられる。

さらに、この点については、高等部の作業学習をどのように考えていくのかということ、さら

にその先で求められる力をとどう考えていくのかということも大きくかかわっていくことは言うまでもなく、同様なことが次で述べる表３に関しても言えると考える。

【表２　各作業班の作業特性】

	農耕カレンダー班	陶工班	手工班
環境	屋外の広い農場が主たる活動場所。気候天候の影響を直接受けながら活動する。	屋内の陶工班作業室が主たる活動場所。	屋内の手工班作業室が主たる活動場所。
作業の身支度	泥汚れを想定した作業服に着替え、長靴、軍手、泥よけ、夏は日よけ帽子を着用する。	学校生活で普段着用している生活着にエプロン、帽子、腕抜きを着用する。	学校生活で普段着用している生活着にエプロン、三角巾を着用する。
活動の特性	○広い農場で全身を動かして活動する。立ち仕事や大腿筋を使う作業で体力をつけていくことができる。 ○作物の育成には時間がかかり、季節や天候、販売時期も影響するため作業内容に変化が生じる。 ○日常的に見慣れた親しみのある作物を取り上げ、その作物を調理する体験を通して、作物への興味関心を持ちやすくできる。 ○１１月のカレンダー作りで、手先を使った作業や、報告・返事の力を伸ばすことに集中して取り組める。	○粘土を成形する作業には、手指の巧緻動作を高めるように工程を工夫することができる。 ○日常生活で製品を使用することができるため、製作の意欲が高まることが期待できる。 ○粘土の持つ特性から、製品によって粘土の細さや皿の大きさを変えるなど作業工程を工夫することができる。 ○活動の仕方は、はじめから最後まで１人で製作する方法や分担して製品を作る方法など集団の実態に応じて進めることができる。	○織り機、アイロン、アイロン台、ミシン、裁縫用品等、の扱いを通して、道具の正しい扱い方、安全への配慮等を身に付けていける。 ○どんな製品を作るかは、計画的に製品の製作工程や難易度を上げていくことができ、一つの製品をはじめから最後まで作る方法も、部分ごとに分業して作る方法もいずれも生徒の実態に応じて進めやすい。 ○製品への関心が高められるよう、数種類の製品を取り上げるようにすることで、それぞれの生徒が主体的に製品作りに取り組めるよう計画しやすい。

次に、共通する指導内容については、①「移動・入室・準備場面」②「作業中」③「休憩時間」④「片付け・反省会・退室場面」の４つの場面に区切って整理することで、表３のように、３つの作業班ともに重視していることについても確かめた。表３のような内容は、就労支援内容配列表では『働くことに関する意識や技能』全般に配列される内容に対応している。

また、平成１９年度に東京都社会福祉協議会が実施した「福祉、教育、労働の連携による知的障害者の就業・生活支援」の調査結果と照らし合わせると以下のことも明らかになった。

同調査において『企業が知的障害者を雇用する際及び雇用継続にあたって重視する点は何か』との質問に対し、半数以上企業が重視すると回答した項目が「時間をきちんと守れる」「指示したことを理解できる」「わからないことがあったら質問できる」「あいさつがきちんとできる」という項目であったという結果である。これは企業で就労している人たちに対して言われていることであるものの、中学部において、各作業班共通で指導の重点に置いていることの中には、この結果と同じ方向感で重視している項目が３項目ある。このことも踏まえ、将来の社会生活において必要であると考えられていることが就労支援内容配列表に配列されているかという確認が必要であると考えられた。

さらに、こうして各作業班共通の指導の重点を検討するなかで、生徒本人の将来の職業生活や社会自立の基礎となる力に繋げるためには、こうした内容が大切であることを生徒本人が理解し、行動化し、保護者にも適宜伝わるようにしていくことも不可欠であるということも再確認された。これは就労支援内容配列表の【自己理解と職業適性】にも通じることとして、そこに向けてのアプローチの一つに、自分のやった仕事を振り返る時に使う作業日誌（バザー日誌）の検討を行う必要性が確認された。

【表３　各作業班共通でつけたい力】

移動・入室・準備	○遅刻せずに入室する。
	○きちんと挨拶をする。
	○自発的に身支度・準備に取りかかる。
作業中	○はっきり返事をする。
	○自分の仕事がわかる。
	○仕事の区切りで報告をする。
	○わからないことを質問する。
	○間違えたときにすぐ報告する。
	○自分の仕事に一定時間持続して取り組む。
	○自分の仕事に集中して取り組む。
	○自分の目標に向かって作業する。
休憩時間	○必要に応じ、トイレを済ませる。
	○仲間とゆっくり過ごす。
片付け・反省会・退室	○きちんと片付ける。
	○自分のやった仕事を振り返る。
	○自分の目標について振り返る。
	○作業日誌に記入する。
	○きちんと挨拶する。
	○忘れ物をしないで退室する。

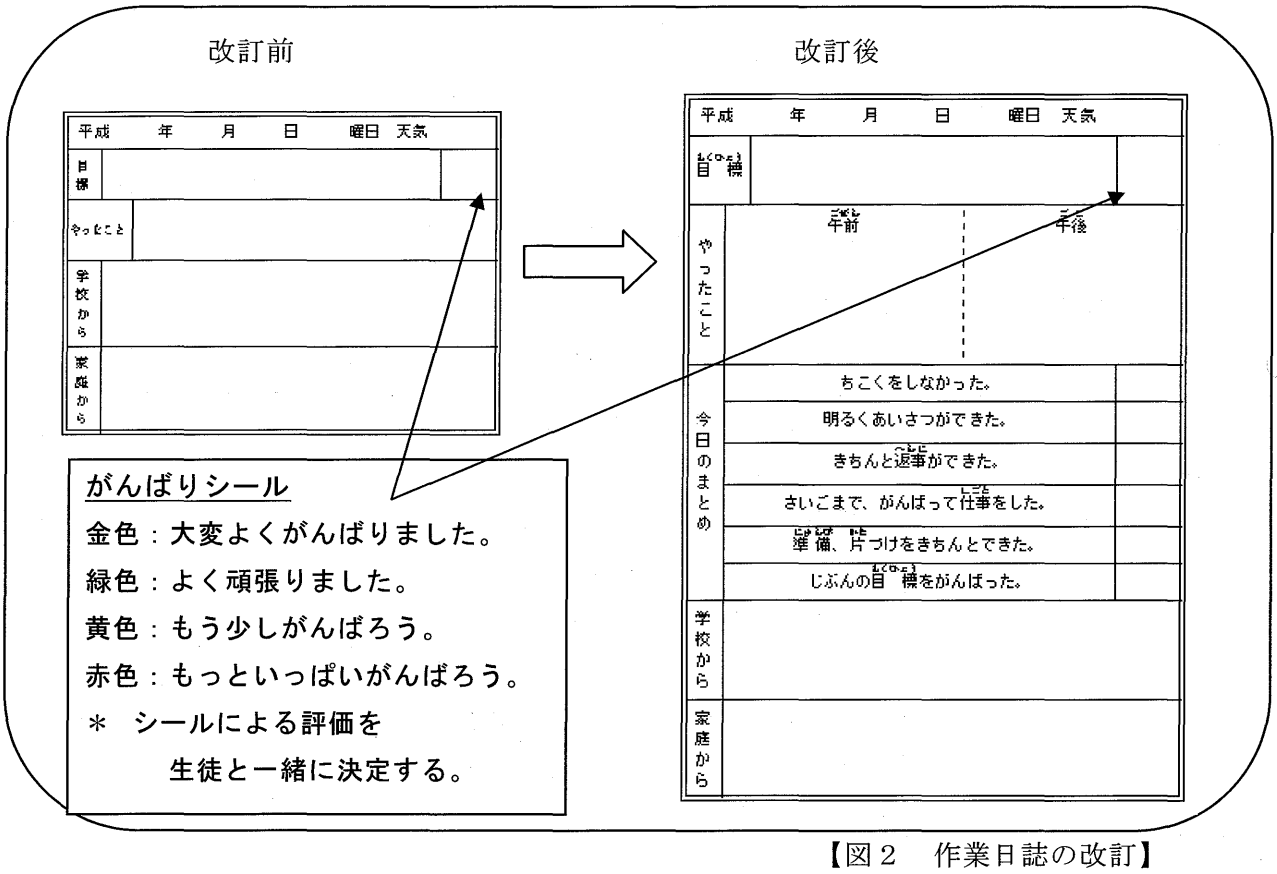
２）各作業班共通でつけたい力の指導と学習の振り返り

前述の検討を経て、作業日誌の検討を行った。実施期間は１１月に４週間計画しているバザー期間である。この期間に用いる日誌は「バザー日誌」という名称で４週間、３つの作業班共通の書式で使用する。

図２に示すように、日誌の改訂を実施した。これまでの中学部のバザー学習に関する研究の成果と、これまでの実践から、図２に示した内容の「がんばりシール」の扱いについては継続することとした。その上で、生徒本人がその日の自分の仕事の評価ポイントを自己理解し、次に活かしていけること、保護者にも適宜伝わるようにしていくことを意図して改訂を行った。また、この点に関連して、バザー期間終了後、新しい書式の日誌について保護者にアンケート調査で、感想等を確認した。

日誌の「今日のまとめ」は教員と一緒に記入し、がんばりシールも教員と一緒に考えて色を決める方法をとっている。この理由としては、中学部段階の子どもたちは「今日のまとめ」のよう

な項目について、どれも「できた」と自己評価してしまい、どういう状態が「できた」「できていない」なのかを自己理解することにつながる経験の蓄積が必要と思われる生徒も多いためである。



【図２　作業日誌の改訂】

新しい作業日誌を使い始めて、生徒自身は自分の目標以外に作業学習で気を付けることを意識出来るようになってきたと教員が実感できるエピソードもいくつかみられた。例えば、日誌の項目を記入しながら「遅刻してしまったから、今日のシールの色は・・・」等と自分の仕事を振り返り自己評価するようになった生徒が少しずつ多く見られるようになってきた。

一方で保護者からも以前より子どもの様子がわかるようになったと思うという意見が多数を占めた。就労に向けての基礎となるような「今日のまとめ」の項目について、家庭との共通理解を図り、連携して支援できるようにしていくことについて一つの成果があったと考えている。

３．支援内容配列表の改訂に向けての視点

作業学習の授業研究や自分のやった仕事を振り返る時に使う作業日誌（バザー日誌）の検討等を実践的に行っていくことで、以下の内容修正が必要と考えられた。

１点目は、就労支援内容配列表＞働くことに関する意識や技能の項目に追加すべき項目があるのではないかということである。今回検討した「各作業班共通でつけたい力」の結果をもとに、他学部との段階性を踏まえた議論が必要であると考えた。

２点目には、就労支援内容配列表＞自己理解と職業適性＞自己理解・自己選択＞「○自分の好きなこと・嫌いなことがわかる。」は、違う表現が望ましく、好きか、嫌いかで経験を狭めかねない記述になっており、誤解をもたらしかねないということである。

３点目には、就労支援内容配列表＞自己理解と職業適性＞自己理解・自己選択＞「自分の得意なことがわかる」は、中学部段階では「自分の得意なことを拡げる」の方がよいのではという意見である。これについても２点目と同様で、経験を狭めかねないと考えられる。これに関連して

国立特別支援総合研究所が作成した「知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階内容表（思案）２００８」には、中学部のキャリア発達の段階での人間角形の形成能力＞自己理解に「達成感に基づく肯定的な自己理解」が育てたい力としてしるされている。こうした見方は今回検討した内容とも重なると考えられる。

４点目には職業生活の理解と生活設計＞職業生活の知識と理解＞職業生活について＞「○作業学習に参加する」は、働くことに関する意識や技能＞働く意欲、喜び、役割意識に、含まれている内容を指しているのではないか、むしろ「○作業学習で作った製品を販売して得た収入で余暇活動をし、働く生活の経験をする。(仮)」のような内容がここにふさわしくないかということを作業学習全体を通して考えた。これに関連して国立特別支援総合研究所が作成した「知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階内容表（思案）２００８」には、情報活用能力＞働くことの意義に「様々な職業があることに関する体験的理解」とあるが、本校の意図する内容とに違いがある。この点については再度本校の他学部との段階制も踏まえた議論が必要なところである。

Ⅳ．まとめと今後の課題

本校中学部の作業学習は「ものを作ったり、育てたりすることに興味を持ち、目的的に活動することを通して、将来の職業生活や社会自立の基礎となる力を培う。」ことを全体目標としている。基本的には、就労に直結する技能や資格がとれるよう育成するのではなく、作業学習を通して、就労した時にいろいろな職種で求められる基礎的な能力を身につけていけるように意図して内容を設定している。平成９年、雇用促進法改正により知的障害の人の雇用率が発生したことで職域が広がっており、それに伴って東京都に職業科ができたりした。こうした現状をふまえて作業学習の作業内容の是非も検討しなければならないという意見もある。今回の研究ではそれぞれの作業種の特性もさることながら、どの作業種においても共通して重視している指導内容を整理し、中学部で大切にしている就労支援の内容について検討した。その結果、就労支援内容配列表に記されている項目の中でも、中学部では「働くことに関する意識や技能」および「自己理解・自己選択」の各項目が他の項目以上にウエイトが置かれていることが確認され、キャリア発達段階の視点とも摺り合わせ、検討を要する内容を洗い出した。　この内容の是非については他学部とのすりあわせを行う必要がある。その成果が、支援内容配列表の部分的修正になるか、或いは中学部の作業学習および他の学習の再構成になるかを方向付けると考える。

また、作業学習以外の学習場面で就労支援につながる内容が中学部段階でどう抑えられているか、どう抑えることが望ましいかを検討することもキャリア発達段階の考え方をもとに行わなければならない。これは、支援内容配列表の区分のあり方を検討する上での大切な資料の一つを得るのではないかと考えた。

引用・参考文献

・「知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の推進」東京都教育委員会、平成 21 年 3 月
・「特別支援教育のためのキャリア教育の手引き」全国特別支援学校知的障害教育校長会、平成 22 年 3 月
・東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要 No. 42～43（1997～1998）
・東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要 No. 46～48（2001～2003）

農耕・カレンダー班

1．班の目標

- 作物を育てる楽しさや、収穫の喜びを味わう。
- 持続して一つの仕事に取り組む。
- 協力して来年のカレンダーを作る。
- 色々な農具の扱いに慣れる。

2．年間の指導計画

主な題材

- ジャガイモ、サツマイモ、大根、葉物野菜などの栽培、収穫。
- カレンダーの作成。
- 作物、製品の販売。

2．年間の指導計画

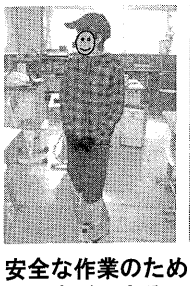
時期	学習内容	指導内容
通年	農作物の栽培・収穫 カレンダーの作成 作物・製品の販売	挨拶・返事・報告 安全な作業の身支度 仲間関係
4月 ～7月	夏野菜の収穫	作業のやり方を覚える 畑での仕事がわかる 道具を安全に扱う
9月 ～11月	秋野菜の種まき、苗植え カレンダーの作成 販売	道具の扱いに慣れる 手先を使った細かい作業 返事・報告 収穫物、製品を売る経験
12月 ～3月	秋野菜の収穫 畑の管理 （肥料まき、落葉入れ） ジャガイモ植え	集中力の持続 頑張ったことをまとめる 来年度の準備をする

2．年間の指導計画

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
畑の管理	うね・草とり	うね・草とり	うね・草とり	水・草とり	水まき・草とり	うね・草とり	水・草とり	水・草とり	たいひ	たいひ
ねぎ		植え						収穫	収穫	収穫
サツマイモ			植え					収穫		
大根						種まき		収穫	収穫	
ジャガイモ				収穫						
きんぎん								収穫		
カレンダー								作成		

3．作業の実際

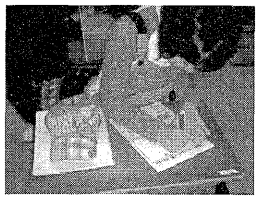
着替え・集合



・安全な作業のための身支度ができる。

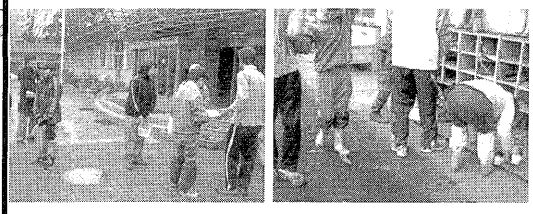
・時間を意識して準備する。
・集合時間を守る。
・係りは作業内容を板書する。

ミーティング（分担・目標の確認／日誌の記入）



・作業場所（畑）では、指示が通りにくくなるため、ここで分担を覚えるよう促す。
・分担や目標を仲間の前で発表し、記入することで、意識付けする。

作業場所への移動（集団行動）



・「担当の持ち物を持つ→玄関に集合→農舎へ移動→長靴に履き替える→名札を返す→席に座る」の流れを集団の流れにのって行う。

畑の仕事１

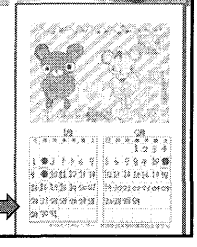
畑の仕事２

・安全な道具の扱い方を知り、道具の扱いに慣れる。
・長靴や土のために足元が不安定な場所で、足腰を使って活動する。
・暑さや寒さの中で仕事をする体力をつける。
・汚れることへの耐性をつける。
・全身を使った仕事の後の適度な疲労感を得る。

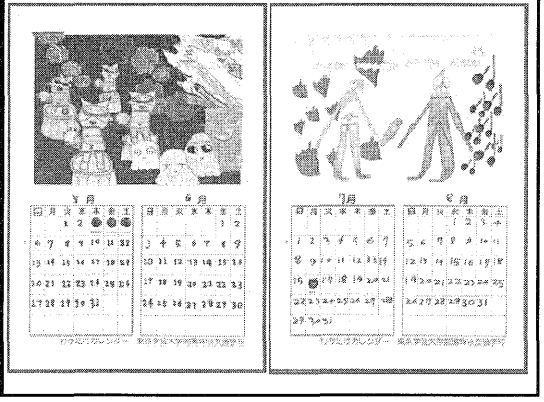
カレンダー作り（11月バザー期間）

・畑では作りにくい、挨拶・返事・報告の機会を多く設定し、徹底する。
・手先を使った、机上の細かい仕事をたくさん経験する。

2012年のカレンダー



１０１２年カレンダー

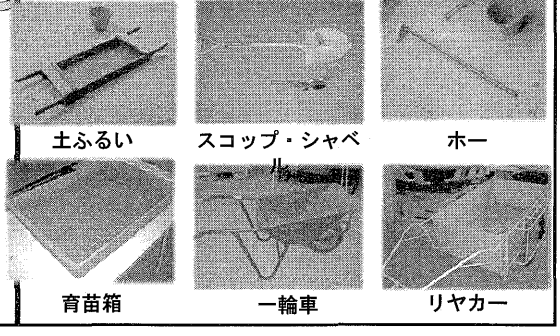


まとめ（休憩／反省会／日誌の記入／退出）

・お茶を飲みながら、一緒に作業した仲間との会話を楽しむ。
・日誌の反省欄に記入し、個人で振り返りをする。
・反省を発表し合って、全員で振り返りをする。
・校舎に戻り、作業着から着替えて、片付ける。

4．農耕・カレンダー班の特徴

・身のこなしが求められる様々な道具を扱う。



4．農耕・カレンダー班の特徴

- 主な学習場所が畑となるため、フィールドが広く、指示が通りにくい。
- 作物によって活動場所が変化する。
- 作物の生育管理（水、肥料、草取り）が、年間を通して必要となる。
- 天候に影響を受けやすく、雨天プログラムへの変更がある。
- 外気温に対して本人の体調のコントロールが必要になる。
- 11月のカレンダー作成作業で、集中して報告・返事に取り組む。
- 販売時期に合わせて、作物を収穫する必要がある。

陶工班

1．目標

○作業班の仕事を理解し、主体的に作業を進める。

○道具の扱いに慣れる。

○良い製品を作ろうとする意識を持つ。

○仕事に対する興味関心を広げる。

2．年間の指導計画

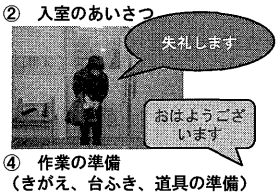
時期	指導内容	
通年		挨拶・返事・報告 身なりを整える 粘土の扱い
4月～7月 Ⅰ期	作業に取り組む基本的な態度、粘土の扱い、製作工程の基本的な知識と技術の習得	作業の準備・片付け 報告・質問 道具の使用方法 製作工程の理解
9月～11月 Ⅱ期	決められた製作工程を理解し、制限時間内に質のよい製品を完成できるように作業をすること	製品手順の理解 正確さ・スピード 作ったものの良い悪いの判断 失敗の原因の理解
12月～3月 Ⅲ期	工程ごとに分担し繰り返し作業し、技術を向上させたり役割を意識すること	1つの製品をつくる過程での役割の理解 質と量の向上 他者と協力する

3．作業の実際

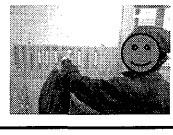
入室・退室について

① くつの はきかえ

② 入室のあいさつ



③ 札をかえす



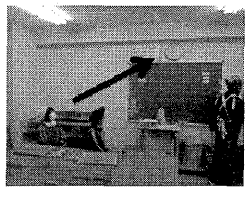
④ 作業の準備
（きがえ、台ふき、道具の準備）

3．作業の実際

導入

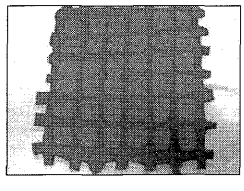
① 班長が時間を見てあいさつをする

② 製作意欲を高めるために製作した皿の紹介をする

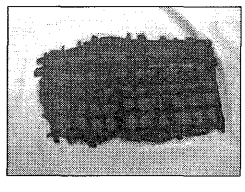


3．作業の実際

玉とひもが均等な製品



玉とひもが均等でない製品



3．作業の実際

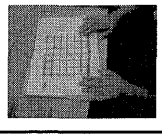
技術の習得～カップの製作工程について～

準備

粘土玉を作る

ひもを作る

ひもをおく



3．作業の実際

技術の習得～カップの製作工程について～

粘土をたたく

たたら板とのし棒で、のばす
（6mm → 5mm）

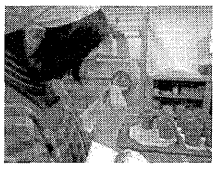
型紙をあて、針で切る

カップに巻きつける

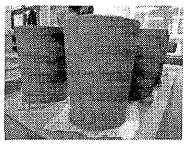
3．作業の実際

技術の習得～カップの製作工程について～

底をつけて修正する

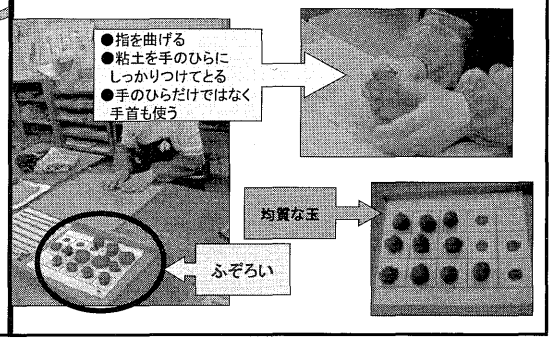


完成



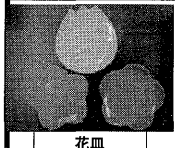
3．作業の実際

技術の習得～（例１）手のつかいかた～



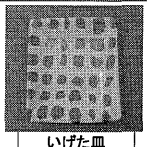
3．作業の実際

基本的な道具の使い方を学ぶ製品



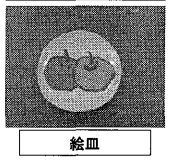
花皿

手の使い方を学習する製品



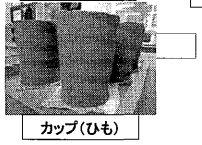
いけた皿

さらに高度な手の巧緻性を必要とする製品



絵皿

製品について



カップ（ひも）

4．陶工班の特徴

○手指の操作能力の向上。

○身近な食器を作ることで、意欲を高めることができる。

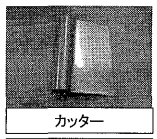
○可塑性にすぐれているため、くりかえしの学習が可能である。

4．陶工班の特徴

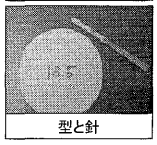
道具の紹介

環境を整えながら作業できるように、使用した道具はすぐに片づけるように指導している。

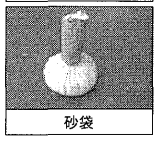
のし棒＆たたら板



カッター



型と針



砂袋

4．陶工班の特徴

教材（粘土）の特徴

①可塑性	自在な形に変化できること
②粘着性	粘土と粘土を簡単につけたりちぎり取ったりできること
③色粘土	粘土を多様な色に変えることができる
④再生可能	固形化したり造形に失敗した粘土に水分を加えることによって粘土を再生することができる。
⑤焼成可能	高温で焼成することができ、半永久的に形状を保持することができる

手工班

1．手工班の目標

1）自分の仕事を理解し、主体的に作業を進める。

2）いろいろな道具の安全な扱い方を身につける。

3）作業時に必要な返事・挨拶・報告をする。

4）よい製品作りをすることを意識する。

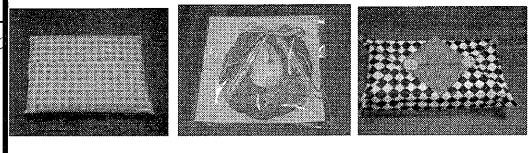
2．年間の指導計画

期間	主な題材	指導内容
通年	各種製品（販売品）づくり	挨拶・返事・報告 安全で衛生的な身支度 手元を見る（集中力の持続）
4月 （導入）	オリエンテーション	手工班の仕事を知る
4月～7月 （Ⅰ期）	アイロンビーズ製品 織物（花瓶敷き） ティッシュケース	製作工程の見通しをもつ 道具の安全な使い方を知る
9月～12月 （Ⅱ期）	アイロンビーズ製品 織物（マフラー） ティッシュBOXカバー、リース	担当の製品を決め、責任をもって作る 販売を意識した製品作りをする バザーで売る製品を作る
1月～3月 （Ⅲ期）	注文製品作り 今年度の反省	分担して作業する ていねいに製品を作る

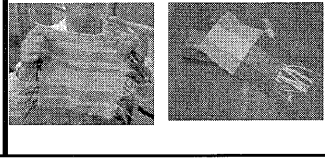
3．作業の実際

製品

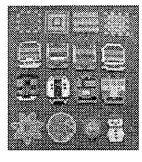
○簡単な布製品



○織物製品



○アイロンビーズ製品



入室・準備

班長

鍵を開ける・閉める

ゴミを捨てる

出欠点呼・開始の号令

反省会の司会

副班長

窓を開ける

床掃除をする

タイムキーパー（係）

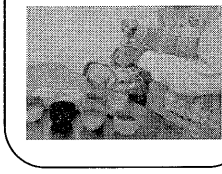
休憩・片づけの時間を知らせる

日付係

ﾎﾜｲﾄﾎﾞｰﾄﾞの日付を書く

お茶係

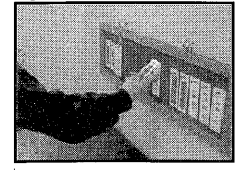
お茶の用意



①身支度

②入室

③札を返す



④机を拭く

作業　打ち合わせ

①出欠の点呼（班長）

③号令をかける（班長）

②教員の話
（作業時間・担当の確認）

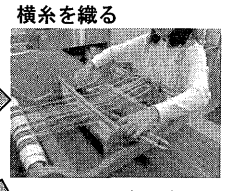
④道具の用意

織物

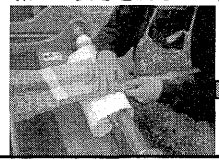
○繰り返し同じ手順で織っていく簡単な工程。
○生徒の実態に合った課題を用意しやすい。
（横糸の張り方の力加減、横糸のかえ方）

横糸の用意

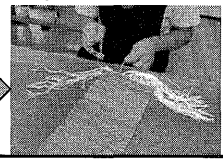
横糸を織る



織った長さを測る

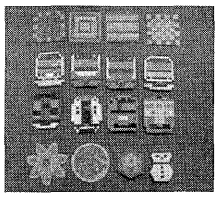


縦糸の仕上げ結び

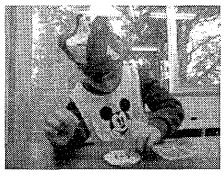


アイロンビーズ製品

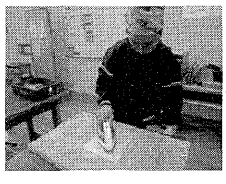
○デザインで難易度を調節することができる。
○完成への過程・報告のタイミングがわかりやすい。
○アイロンを安全に扱う機会を多く設定できる。



ビーズを並べる



アイロンをかける

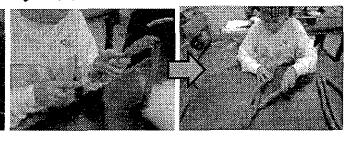


簡単な布製品

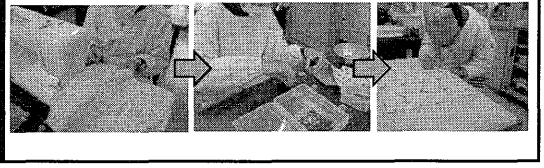
○ミシンや裁縫道具の扱い方が身に付く。
○題材を生徒の実態に合わせ、多様に変えられる。

テッシュケース

リース



テッシュＢＯＸカバー

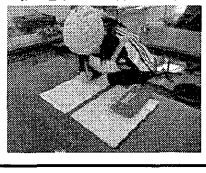


まとめ（反省会）

①片づけを開始する
（タイムキーパーの号令）

③反省会を始める
（班長の号令）

②日誌を書く（自己評価）



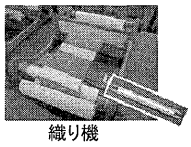
④教員の話をきく（評価）

⑤「おつかれさまでした」
（班長の号令）

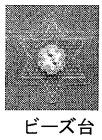
4．手工班の特徴

○道具の正しい扱い方、安全への配慮等を身に付ける。

ミシン

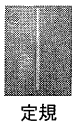


織り機



ビーズ台

針箱



定規

裁ちバサミ

アイロン

アイロン台

○計画的に製品の製作工程や難易度を上げていくことができる。
→生徒の実態に応じて進めやすい。

○複数の製品→製品への関心を高め、主体的な取り組みを促しやすい。